Japan Beyond Coal | ファクトシート

気候危機 —気候変動が危機的な被害をもたらす

地球温暖化問題が語られるとき、最近は「気候危機」という言葉が使われるようになりました。私たちの生活は便利で豊かになった一方、エネルギーや資源を大量に消費するため、温室効果ガスの排出量が増え、地球全体の気温が上昇しています。その結果、気候変動が起こり、世界中で“異常”気象が発生、日本においても記録的な豪雨が頻繁に観測されるなど、さまざまな気候変動災害にみまわれるようになりました。この異常気象がもたらす被害も甚大なものとなり、人類や生き物の命の危険にさらされる可能性が高くなったことから、「気候危機」と表現するようになりました。

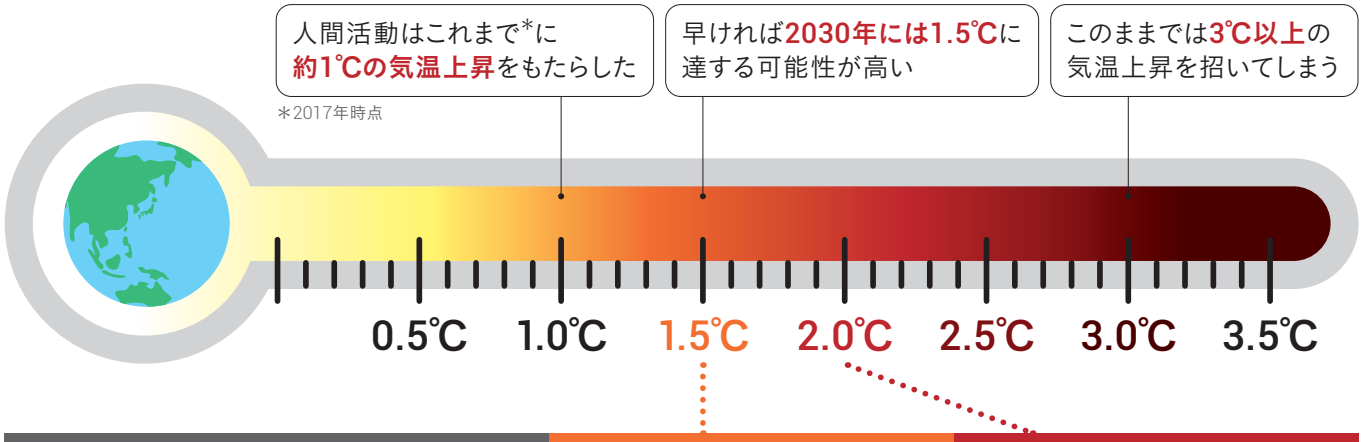
地球の平均気温は1℃上昇

産業革命前のレベルと比べて、地球の平均気温は約1℃上昇しました。「たった1℃」とはいえ、地球の長い歴史の中で短期間に起こっている、とてつもない変化なのです。

気温上昇がもたらすリスク

地球温暖化が原因で起こる気候変動は、さまざまなリスクを含んでいます。近年の研究では、現在と1.5℃の地球温暖化の間、さらに0.5℃の上昇、すなわち2.0℃上昇との間には、明確な違いがあることが分かってきています。

地球全体の平均気温上昇の状況と気温上昇で予想される現象



現象	1.5℃の上昇	2.0℃の上昇
中緯度域（北緯・南緯30度～60度付近）の**気温**	極端に暑い日の気温が約3℃上がる	極端に暑い日の気温が約4℃上がる
干ばつ被害（被害を受ける都市人口）	最大で5億人	最大で6億人を超える
洪水被害（被害を受ける人口）	100%増加（1976～2005年を基準）	170%増加（1976～2005年を基準）
サンゴ礁の消失	さらに70～90%が減少	ほぼ全滅
世界全体での年間**漁獲量**の損失	150万トン	300万トン超
健康被害	1.5℃の昇温に比べ、2℃の昇温で**暑熱による疾病・死亡リスクが増加**／マラリア・デング熱など**感染症リスクが増加**	

※IPCC「1.5℃特別報告書」（2018年10月）を参考にJBCが作成

ここがポイント

1.5℃の上昇にとどめるためには、二酸化炭素（CO_2）の排出を地球全体で 》》 2030年までに2010年比45%削減、2050年には実質ゼロにする必要がある

気候危機 —気候変動が危機的な被害をもたらす

日本における気候危機

日本においても、梅雨シーズンによる豪雨や台風による被害が毎年発生、“記録的な大雨”というフレーズも頻繁に使われるようになっています。近年の主な災害状況は右表に示す通りです。

例えば、2019年の「台風第19号」は、10月10日〜13日までの総降水量が神奈川県箱根で1,000ミリに達したほか、静岡県、新潟県、関東甲信越地方、東北地方の多くの地点で観測史上1位を更新しました。極めて広範囲にわたり河川の氾濫やがけ崩れ等が発生、甚大な被害が発生したのです。また記憶に新しい「令和2年7月豪雨」においても台風並みの被害をもたらしました。気象庁は、この豪雨を2020年8月20日開催の異常気象分析検討会で分析、地球温暖化の進行に伴う長期的な大気中の水蒸気の増加により、降水量が増加した可能性があることを公表しています。このように、大きな被害をもたらす異常気象は私たちの生活や命を脅かす気候危機として迫ってきています。

日本における近年の主な気象災害一覧

災害名	主な被害状況
令和2年7月豪雨 (2020年7月)	死者82名　行方不明者4名 全半壊2,328棟　床上浸水6,985棟
台風19号 (2019年10月)	死者104名　行方不明者3名 全半壊33,332棟　床上浸8,129棟
台風15号 (2019年9月)	死者1名　行方不明者0名 全半壊4,269棟　床上浸水127棟
台風24号 (2018年9月)	死者1名　行方不明者1名 全半壊108棟　床上浸水22棟
平成30年7月豪雨 (2018年7月)	死者237名　行方不明者8名 全半壊18,010棟　床上浸水7,173棟
台風21号 (2017年10月)	死者8名　行方不明者0名 全半壊20棟　床上浸水2,456棟
台風18号 (2017年9月)	死者5名　行方不明者0名 全半壊8棟　床上浸水1,627棟

※9月23日現在、内閣府災害情報のページを参考にJBCが作成

2020年7月豪雨_熊本県阿蘇小国杖立温泉

2020年7月豪雨_熊本県阿蘇小国杖立温泉